

〔大和文華館名品展によせて〕

尾形光琳筆「雲竜図」(扇面貼交手筥)について

「扇面貼交手筥」は桐の箱に八面の扇面画と四面の団扇画を貼った作品です。三枚の扇面画に光琳の落款と印章があり、他の作品も光琳あるいは光琳と関係の深い絵師によって描かれたと考えられています。扇面画に折り畳まれた跡、団扇画に骨が挿されていた跡が残ることから、当初は、それぞれ独立した扇面画、団扇画として制作され、ある時期に一組にまとめて、手筥に貼られたことがわかります。四隅を曲げた大振りの手筥は扇面画、団扇画を貼るために、特別に跳えられたと思われる。手筥の形状に合わせて各作品を配置し、貼る角度を微妙に調整しており、工芸作品としても優れた芸術性が認められます。尾形光琳は蒔絵作品を制作していますので、光琳自身が手筥に貼ったのかもしれませんが。

全体の構成において最も鮮やかな印象を与えるのは、二面の扇面画、「富嶽図」と「雲竜図」(図1)です。「富嶽図」と「雲竜図」には、ともに光琳の落款と印章があり、手筥の中に納めた中籠の表裏に貼られています。蓋を開けると、内側に差し込む光によって、極彩色の雄大な富士山が姿を見せ、中籠を裏返せば、一変して、水墨の黒雲から竜が立ち現れます。映画のモニター・ジュ技法のように、「富嶽図」から「雲竜図」へ続く展開は、竜が富士山から昇天する

物語を想わせます。

大和文華館は平成22年の秋に開館50周年を迎え、記念に「富嶽図」と「雲竜図」の複製品を製作しました。複製品の制作に校正を重ねたことは、作品の理解を深めるよい機会になりました。特に、「雲竜図」の複製品(図2)では、裏側に折られた部分を補うことで、全体の画面構成が見渡せるようになりました。画面の左上に竜の胴体が描かれることから、この竜は画面の左から右へ進み、体を反転させて、中央の下方から斜め右へ向けて顔を上げていることがわかります。竜の背中から顔にいたる軌跡は8の字を滑らかに描き、顔を中央に据えて、背中や両肩から伸びる光焰を旋回するようにまとめています。画面の中心が中央からやや右に寄った竜の顔に設定されていることは明らかであり、竜の顔を中心とする円の中に竜の姿を納めています。両端に描かれた金泥の大きな巻雲が竜の姿と調和し、画面全体の均衡を図る重要な役割を果たしていることもわかります。湾曲した扇面に応じて、知的に画面が構成されていますが、胴体と手足の関係など、雲に隠れた竜の姿を具体的に想像することは容易ではありません。光琳は竜の姿を説明的に描こうとせず、光琳らしく優美に表現しています。竜の霊獣としての迫力は、濃墨の外隈によって白く浮き上がる顔、鋭い眼

光によって表現されています。目の周囲にも淡墨を施して目に強い立体感と光を加え、鑑賞者に向けられた視線に力と動きをもたらしています。「雲竜図」は「扇面貼交手筥」の中でも、高く評価されてきました。日本画家の山口蓬春氏は「光琳筆扇面貼交手筥メモ」(「大和文華」33号、1960年)において、「此の手筥中の作品中随一。墨気特の外よろし。宗達墨画にも劣らぬ出来栄なり。」と記しています。

『易経』に「雲は竜に従い、風は虎に従う」と記されています。狩野派や海北派など、中国絵画に学ぶ漢画系の絵師たちが得意とする画題ですが、光琳が私淑した俵屋宗達が描いたと伝えられる作品も数多く残されています。最も有名な作品は「雲竜図屏風」(フリア美術館蔵・図3)です。この作品では、竜にあまり墨の陰影を施さず、周囲に加える墨の濃淡によって、竜の姿を白く浮かび上がらせています。このような外隈による立体感の表現をはじめ、細部表現にいたるまで、「雲竜図屏風」は「雲竜図」に近い作風を示しています。光琳が宗達作品の竜の表現を学んでいることは確かです。相違点を上げれば、「雲竜図」では竜の火焰の量感と動勢が強調され、竜の目鼻の表現も若干異なります。しかし、このような表現も、その造形表現そのものに注目すれば、他の宗達作品に類例が見出せます。竜の火焰では、「犀図杉戸絵」(養源院蔵)や「松島図屏風」(フリア美術館蔵)の波頭、竜の目鼻の表現は、むしろ「風神雷神図屏風」(建仁寺蔵)の風神の顔を思わせます。光琳は「松島図屏風」と「風神雷神図屏風」の

模写作品を残しています。模写といっても、そのまま引き写した作品ではなく、光琳自身の美意識が多分に反映され、模写することによって、独自の表現を探し求めているようです。先ほど指摘した波頭と顔の表現においても、光琳が模写した「松島図屏風」(ボストン美術館蔵)の波頭(図4)と「風神雷神図屏風」(東京国立博物館蔵)の雷神の顔(図5)は、原本となった宗達作品の「松島図屏風」(フリア美術館蔵)、「風神雷神図屏風」(建仁寺蔵)よりも、「雲竜図」の竜の火焰と顔の表現に近づいています。光琳作品の「松島図屏風」の波頭には、「雲竜図屏風」の竜の火焰と共通する躍動感が表現されていることになります。「雲竜図」には光琳が宗達学習をもとに確立した光琳様式が明確に示されています。(中部義隆)

※図3・4は『琳派』第三巻「風月・鳥獣」(紫紅社、1991年)、図5は『琳派』第四巻「人物」(紫紅社、1991年)から複写しました。

図5



図4

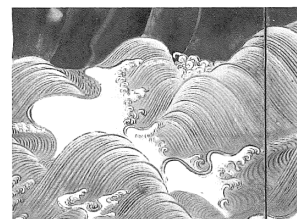


図3

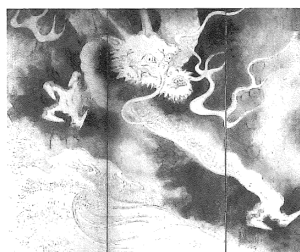


図2

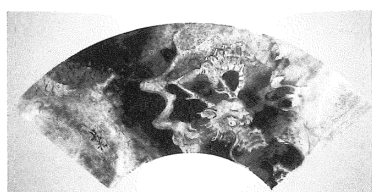
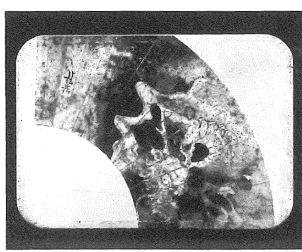


図1



季刊 美のたより No.178

平成24年4月15日

発行 大和文華館